

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1425
施設名	目黒東山ちとせ保育園
施設所在地	東京都目黒区東山2-10-17
法人名	社会福祉法人ちとせ交友会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

音～身近な音との出会いと発見～

<テーマの設定理由>

子ども達は、日頃から保護者の歌やピアノに合わせて自然と体を揺らしたり歌う事を楽しむ姿が見られる。楽器遊びにおいても自ら音を鳴らし、楽器の違いを楽しむ様子が見られる。そこで、子ども達がもともと持っている「音が好き」という気持ちを出発点とし、歌や楽器遊びにとどまらず、生活の中に溢れている様々な音（環境音・自然音・生活音）にも目を向けられるように考え本テーマを設定した。音は目に見えないが耳を澄ませることで気がつきがうまれ探求心が引き出しやすい素材であり、音を通して驚きや発見を共有することで友だちとの関わりや言葉での表現も広がっていくと考えた。身近な音に気がつき、試し、比べ、感じた事を表現する経験を重ねることで、音への興味関心をさらに広げるとともに主体的に関わる姿や感じたことを言葉や身体で表現する力の育ちに繋げていきたい。

2. 活動スケジュール

子ども達は、日頃から保護者の歌やピアノに合わせて自然と体を揺らしたり歌う事を楽しむ姿が見られる。楽器遊びにおいても自ら音を鳴らし、楽器の違いを楽しむ様子が見られる。そこで、子ども達がもともと持っている「音が好き」という気持ちを出発点とし、歌や楽器遊びにとどまらず、生活の中に溢れている様々な音（環境音・自然音・生活音）にも目を向けられるように考え本テーマを設定した。音は目に見えないが耳を澄ませることで気がつきがうまれ探求心が引き出しやすい素材であり、音を通して驚きや発見を共有することで友だちとの関わりや言葉での表現も広がっていくと考えた。身近な音に気がつき、試し、比べ、感じた事を表現する経験を重ねることで、音への興味関心をさらに広げるとともに主体的に関わる姿や感じたことを言葉や身体で表現する力の育ちに繋げていきたい。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

- ・ 楽器（トライアングル・カスタネット・タンバリン・ウッドブロック）
- ・ 画用紙 ・ クレヨン・ 電子黒板・ ペットボトル・ 小豆・ コーン・ ビーズ・ ストロー
- ・ ビニールテープ

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ・楽器（トライアングル・カスタネット・タンバリン・ウッドブロック）
- ・画用紙 ・クレヨン・電子黒板・ペットボトル・小豆・コーン・ビーズ・ストロー
- ・ビニールテープ

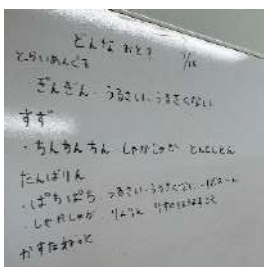
<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

7/28（月） 楽器の音ってどんな音がする？（実際に鳴らしながら尋ねる）すず→リンリン・シャカシャカ、トライアングル→チーン、タンバリン→ボンボン、ポーン、シャラララン、カスタネット→タンタン、ウッドブロック→トントントン

中には「それは違うよ！」と友だちに教える子も・・・保育者は「どんな音でも正解だよ」と伝える。音を絵で描いてみよう！「どんな音でもいいよ！絵で描いてよう！」の保育者の声掛けに最初は「分かんない」

「どうやって描くの？」と保育者に尋ねていた子ども達だったが、音を描き始めた子を見て、真似してそれぞれの音を表現し始める。

中には色んな色を使って音を表現する子も。保育者が尋ねると「色んな音が混ざっているの」と教えてくれた。



2月12日（木）

見本で作ったマラカスを振って見せる。（前回の活動にて）
素材として小豆、ポップコーンの種、ストローを細かく切ったものを用意する。
子ども自身が自分の決めた量の素材をペットボトルの中に保育者に入れてもらい、どんな音が鳴るかを試しながら活動に参加する。
「カラカラ！」「ザザザザー」と音を言葉で表現したり、自分だけのマラカスができたことを喜んだりしていた。
保育者は「いい音だね、そう聞こえるね」と子どもたちの感性を認めながら声を掛けたり、共感したりした。
「どのくらい入れたらいいの？」という子どもには「好きな数入れていいよ」「どんな音になるかな」と言葉掛けをしていた。それぞれの素材を混ぜて入れると1つの素材だけの時とは音が変わったことに気が付き、繰り返し鳴らしていた。素材や量の違いによって自分と友達の奏でる音の違いを楽しんでいた。



2月18日(木)「電子黒板を活用した振り返り」

導入した電子黒板を活用し、子ども達の楽器演奏の様子を撮影し、後日クラスで視聴した。動画を見ながら子ども達からは、「楽しそう」「頑張ってた」「恥ずかしい」といった声が聞かれ、自分や友だちの姿そのものに目を向ける様子だった。また、「音がちょっとずれてる」「もっとできそう」といった発言もあり音の重なりや友だちとの関わり気付く姿も見られた。

演奏中は自分の音を鳴らすことに意識が向いていたが映像を通して客観的に自分たちの姿をみる事で、次の活動への意欲を膨らませる姿へと繋がった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

一年を通して、日常生活の中での音探しや公園で自然物を使った音の発見活動、身近な物を叩いての音の違いを試す活動、手作り楽器の制作体験など様々な実践を重ねてきた。また、演奏ごっこを撮影し視聴するなど、体験を振り返る機会も設けることで、更なる子ども達の発見や気づきへと繋がる。

その様な活動を重ねる中で、子ども達は音を単に「鳴らすもの」として楽しむだけでなく、日常の中でも「この音何?」「この音〇〇みたい」と音を何かに見立てる声や感じた事を言葉で表現する姿が見られた。

音という目に見えない素材だからこそ、子ども一人ひとりの感じ方や表現の違いが豊かに表れるという事に気付かされた。同じ音でも感じ方が異なり、その違いを共有する事で友達の感じた事に気づいたり、自分の思いを言葉にしようとする姿が育まれた。

活動を通して音への興味や探求する姿が広がる一方で、楽器遊びや演奏ごっこの場面では音を楽しむ気持ちが高まり、声が大きくなったり、思いのまま音を鳴らす姿も見られた。発達段階においては「鳴らしたい」「伝えたい」という気持ちがそのまま行動に現れることも多く、友だちと合わせる事の難しさも感じられた。

しかし、その姿は音への関心や意欲の表れでもあり、自己表現の芽生えとも捉える事ができる。音楽を楽しむ経験を通して友だちと共有する心地よさや、場に合った音の出し方にも気付いていけるよう今後も子ども達の探求心を大切に関わっていきたい。

子どもたちの「わくわく」から始まる探求の芽を丁寧に拾い、環境を整え、共に考えていく事の大切さを感じた。今後も子どもの気づきや言葉から主体的な学びができる保育を行っていきたい。同時に子ども同士の関わり合いを大切に、そこから子ども自身が得る更なる「探求心への刺激」へと向かう環境づくりを大切にしていきたいと思う。その事が子ども達への「考えさせるを考える」保育の大切さに改めて感じた。